様式第４号（教員個人に関する書類）

教育研究業績書

令和５年５月１日

氏名　　盛本　浩二　　印

教育上の能力に関する事項		
事項	年　月	概要
１　教育方法の実践例 大阪女子短期大学　担当科目について	平成27年4月 ～平成28年3月	●人間健康学科：微生物学（免疫学を含む）の科目 ●生活科学科　食物栄養専攻　栄養士コース：食品衛生学、食品衛生学実験、食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論の科目 ●生活科学科　食物栄養専攻　製菓衛生師コース：食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論の科目 栄養士・製菓衛生師の育成に努めました。
	平成28年4月 ～平成29年3月	●生活科学科　食物栄養専攻　栄養士コース：食品衛生学、食品衛生学実験、食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論、食品学の科目 ●生活科学科　食物栄養専攻　製菓衛生師コース：食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論の科目 栄養士・製菓衛生師の育成に努めました。
	平成28年4月 ～平成30年3月	●生活科学科　食物栄養専攻　栄養士コース：食品衛生学、食品衛生学実験、食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論、食品学の科目 ●生活科学科　食物栄養専攻　製菓衛生師コース：食品加工学、食品加工学実習、専攻基礎、官能鑑別論の科目 栄養士・製菓衛生師の育成に努めました。
大阪緑涼高等学校　担当科目について	平成30年4月 ～令和2年3月	●調理製菓科：フード基礎
甲子園大学　担当科目について	令和2年4月 ～現在	●フードデザイン学科：食品衛生学、食品衛生学実験、官能評価論、官能評価論実習、機能栄養学の科目 栄養士の育成に努めています。
甲南女子大学　担当科目について	令和5年4月 ～現在	●人間健康学部：食品加工学
２　作成した教科書・教材 電子顕微鏡技術研修会　夏の学校 （免疫電子顕微鏡コース講義資料）	平成19年8月17日 ～平成19年8月19日	第20回電子顕微鏡技術研修会　「夏の学校」テキスト　自主作成

様式第４号（教員個人に関する書類）

電子顕微鏡技術研修会　夏の学校 （免疫電子顕微鏡コース講義資料）	平成23年7月28日 ～平成23年7月30日	第24回電子顕微鏡技術研修会　「夏の学校」テキスト　自主作成
製菓本（タイトル：sweets book）	平成30年3月	大阪女子短期大学　製菓衛生師コースの実習授業で使用されていたレシピを基に食品の特性等を考慮し、現代に好まれる食材も含め、新たなレシピ集としてまとめたものを作成しました。 著者：髙坂廣志、盛本浩二、芝野友香
３　教育上の能力に関する大学等の評価 学生アンケート	平成27年4月 ～現在	年度内に2回行われる学生アンケートの結果では、5段階中、平均4.3と総合的に高い評価を得ている。 また、学生アンケートの結果より最も評価が高い授業としてFD研修の一環で教員対象に公開授業を行い、声の大きさ、話すスピードが学生を集中させる、実習に入る前に学生に何を理解させるか明確である、前回の授業で行ったことを確認しながら授業を進める、たくさんの情報をどのようにわかりやく伝えるかを考える良い機会になったなど高評価を得ている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 大阪大学大学院医学系研究科学位取得のための教育・指導について	平成18年4月 ～平成27年3月	株式会社カン研究所での基礎医学研究の知識を基に、大阪大学大学院医学系研究科　乳腺・内分泌外科において乳癌をテーマに実験指導・論文指導を実施し、多くの大学院生の医学博士取得に貢献いたしました。また、大学大学院医学系研究科　生化学・分子生物学（生化学）においては、グローバルCOEプログラムにて若手研究員の育成に貢献いたしました。
大阪女子短期大学 委員会活動について	平成27年4月 ～平成28年3月	学生委員、FD推進委員、イベント実行委員長、図書館委員
	平成28年4月 ～平成29年3月	学生委員会委員長、建学の理念推進委員長、図書館委員、FD推進委員、高大接続プログラム委員、自己点検評価委員、研究活動監督委員
	平成29年4月 ～平成30年3月	学生委員会委員長、建学の理念委員会委員長、図書館委員、FD推進委員、高大接続プログラム委員会委員長、自己点検評価委員会委員長、研究活動監督委員
大阪緑涼高等学校 活動内容について	平成30年4月 ～平成31年3	校長補佐として高等学校の円滑な運営はもちろんの事、様々な分野の大学・短期大学・専門学校と協定を結び、生

様式第４号（教員個人に関する書類）

	月	徒の希望する進路を開拓しました。また、普通科の教育内容を明確化する目的で、２年生からコース制を新規導入し、大学・短期大学・専門学校と教育の面でも連携し、自身の進路が見える体制を整えた。
	平成31年4月 ～令和 2 年 3 月	進路指導部長として大学・短期大学・専門学校と連携をはかり高大接続事業・進路先の開拓等に努め生徒の希望する進路先へと進学させるシステムの新たな構築を行っています。 調理製菓科長として昨年度新設された科なので課題も多い中、食物関係の進路・進学先の確保・インターシップ事業等を立ち上げるなど、食のスペシャリストを育てることに邁進しています。
甲子園大学 活動内容について	令和２年４月 ～現在	栄養学部フードデザイン学科教授に就任後、入試副センター長を経て、現在、入試センター長を兼任しており、新たな入試制度の導入やオープンキャンパスの運営など様々な入試・広報業務に関して、改革を実施しています。 栄養学部内では、入試委員会委員長、学力強化委員会、産学連携委員会、教務委員会に在籍しており、現在所属しているフードデザイン学科を食創造学科へと改組する取り組みにも中心となりすすめています。
５　その他 なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年　月	概要
１　資格，免許 博士（医学）	平成21年6月 4 日	兵庫医科大学　病理学第１（機能病理部門） 博士（医学）兵庫医科大学 学位記修得　第 313 号 学位論文題目 「Stem cell marker aldehyde dehydrogenase 1-positive breast cancers are characterized by negative estrogen receptor, positive human epidermal growth factor receptor type 2, and high Ki67 expression」
２　学校現場等での実務経験		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 大学・企業との共同研究について	平成 18 年 11 月 ～現在まで	国立病院機構大阪医療センターを研究の場として大阪大学大学院医学系研究科 乳腺内分泌外科、大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学、兵庫医科大学　乳腺・内分泌外科、京都府立医科大学 内分泌・乳腺外科、理化学研究所、エーザイ株式会社筑波研究所、シスメックス株式会社と新薬の研究開発・手術中癌診断技術の開発などを研

		究指導・共同開発をしている。
医学生物学電子顕微鏡技術学会より研修会の依頼	平成19年8月17日 ～平成19年8月19日	第20回電子顕微鏡技術研修会　「夏の学校」にて免疫電子顕微鏡をテーマに実習授業を行った。
	平成23年7月28日 ～平成23年7月30日	第24回電子顕微鏡技術研修会　「夏の学校」にて免疫電子顕微鏡をテーマに実習授業を行った。
こどもゆめ基金助成活動のボランティア講師依頼	平成18年4月 ～現在まで	「親子体験学習　ミクロの生物観察会」年2回のボランティア講師を行っている。 （近年コロナ禍のため活動自粛中）
４　その他 外部資金獲得状況 挑戦的萌芽研究	平成23年 ～平成24年	軸索変性において変化する細胞内シグナル経路の解明 研究代表者 藤原 武志 連携研究者 盛本 浩二
基盤研究（C）	平成27年 ～平成29年	乳癌術前化学療法の治療効果における局所ならびに全身性の免疫応答の意義の解明 研究代表者 今村 美智子 連携研究者 三好 康雄、盛本 浩二、藤本 由希枝
一般財団法人キヤノン財団研究助成プログラム「善き未来をひらく科学技術」	令和3年 ～令和5年	乳がん手術を改革する術中迅速 Click-To-Sense 診断 研究代表者 田中 克典 連携研究者 PRADIPTA AMBARA 、多根井 智紀、島津 研三、盛本 浩二、松田 秀雄
基盤研究（C）	令和4年 ～令和7年	生細胞染色法を用いた乳癌の乳房温存手術の切除断端に対する術中迅速診断の確立 研究代表者 多根井 智紀 連携研究者 盛本 浩二、瀬尾 茂人、 PRADIPTA AMBARA
基盤研究（B）	令和4年 ～令和7年	乳癌における脂質メディエーターを標的とする薬物送達システムを用いた新規治療の開発 研究代表者 永橋 昌幸 連携研究者 奥田 修二郎、盛本 浩二、張 宗哲 、阿部 学、三好 康雄 、大村谷 昌樹 、 PRADIPTA AMBARA
革新的がん医療実用化研究事業	令和4年 ～令和6年	生細胞染色 CTS （Click-to-sense）法を用いた乳がんの乳房温存手術の切除断に対する診断の確立

様式第４号（教員個人に関する書類）

		研究代表者 多根井 智紀 連携研究者 田中 克典、瀬尾　茂人、盛本　浩二、島津　研三、草田　義昭、大東　元就

担当授業科目に関する研究業績等

著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要
○○○○	（学術論文） 1.Genetic dissection of the complex pathological manififestations of collagen disease in MRL/lpr mice （査読付）	共	平成 11 年 11 月	Pathology International 第 49 巻第 11 号	p 974～p 982	多発性動脈炎のモデルとして研究され、血管炎、糸球体腎炎、関節炎および唾液腺炎を含む膠原病など自己免疫疾患を発症する MRL/lpr マウスと病変を発症しない C3H マウスとを交配させ、ポジジショナルクローニングを行い、自己免疫疾患を発症するマウスの遺伝子座解析を行った。結果、いくつかの免疫疾患に関して、原因遺伝子があると思われる領域が明らかとなった。 Nakatsuru, S., Terada, M., Nishihara, M., Kamogawa, J., Miyazaki, T., Qu, W.M., Morimoto, K., Yazawa, C., Ogasawara, H., Abe, Y., Fukui, K., Ichien, G., Ito, M.R., Mori, S., Nakamura, Y., and Nose, M.
	2.Pilt, Novel Peripheral Membrane Protein at Tight Junction in Epitherial Cells （査読付）	共	平成 13 年 12 月	The Journal of Biological Chemistry 第 276 巻第 51 号	p 48350～p 48355	ヒト cDNA ライブラリーを用いた assay より Tight Junction で新規の膜タンパク質を同定し、それを Pilt と命名した。Pilt は 547 アミノ酸から構成されており、プロリンリッチドメインを持っている。また、Pilt が直接 Claudin 又は JAM と相互作用しないことが示唆された。 Kawabe, H., Nakanishi, H., Asada, M., Fukuhara, A., Morimoto, K., Takeuchi, M., and Takai, Y.
	3.JEAP, a Novel Component of Tight	共	平成 14 年 2 月	The Journal of Biologi	p 5583～p 5587	蛍光を用いた発現クローニング法により、Tight Junction (TJ) タンパク質をスクリーニングし、新規の膜タンパク質 JEAP を同定した。JEAP

	Junctions in Exocrine Cells. （査読付）			cal Chemistry 第277巻 第7号		は882アミノ酸から構成され、N末端領域にポリグルタミン酸リピート、中央領域にコイルドコイルドメイン、C末端領域にＰＤＺドメインに結合するためのコンセンサスモチーフを含んでいることを明らかにした。また内因性JEAPは、膵臓、顎下腺、涙腺、耳下腺、舌下腺などの外分泌細胞の TJ に局在していることを免疫電子顕微鏡法を用いて明らかにした。 Nishimura, M., Kakizaki, M., Ono, Y., Morimoto, K., Takeuchi, M., Inoue, Y., Imai, T., and Takai, Y.
	4.Arthris in MRL/lpr Mice Is Under the Control of Multiple Gene Loci With an Allelic Combination Derived From the Original Inbred Strains. （査読付）	共	平成14年4月	ARTHRITIS & RHEUMATISM 第46巻 第4号	p 1067～p 1074	多発性動脈炎のモデルとして研究され、血管炎、糸球体腎炎、関節炎および唾液腺炎を含む膠原病など自己免疫疾患を発症するMRL/lprマウスと病変を発症しないC3Hマウスとを掛け合わせ、病理組織学的に関節炎を発症しているマウスにターゲットを絞り遺伝子座解析を行った。結果、15番染色体上の D15Mit111 と D15Mit18（地図位置 17.8-18.7cM）の間および19番染色体上の D19Mit112 と D19Mit72 間（地図位置 43.0-55.0cM の間）に関連遺伝子があることが明らかとなった。 Kamogawa, J., Terada, M., Mizuki, S., Nishihara, M., Yamamoto, H., Mori, S., Abe, Y., Morimoto, K., Nakatsuru, S., Nakamura, Y., and Nose, M.
	5.CAST: a novel protein of the cytomatrix at the active zone of synapses that forms a ternary complex with RIM1 and Munc13-1. （査読付）	共	平成14年8月	The Journal of Cell Biology 第158巻 第3号 p 577～p	590	ラットの脳から約120kDの新規CAZタンパク質を同定し、それを CAST（CAZ 関連構造タンパク質）と命名した。CASTは膜貫通セグメントを有せず、4 つのコイルドコイルドメインおよびPDZドメインへの結合のためのコンセンサスモチーフを有している。また、CAST は直接 RIM1 に、そして間接的に Munc13-1 に結合することを明らかにした。 Ohtsuka, T., Takao-Rikitsu, E., Inoue, E., Inoue, M., Takeuchi, M., Matsubara, K., Deguchi-Tawarada, M., Satoh, K., Morimoto, K., Nakanishi, H., and

						Takai, Y.
	6.Direct Binding of Cell Polarity Protein PAR-3 to Cell-Cell Adhesion Nectin at Neuroepithelial Cells of Developing Mouse Molecule. （査読付）	共	平成 15 年２月	The Journal of Biological Chemistry 第 278 巻第８号	p 5497 ～ p 5500	既存の報告で、PAR-3 は Tight Junction(TJ)に局在していることが報告されている。今回 TJ を形成しないマウスの embryonic telencephalon を用いて免疫電子顕微鏡解析により PAR-3 が Adherens junction(AJ)に局在していることが明らかとなった。また、AJ に局在している Nectin-1、-3 と結合していることが明らかとなった。 Takekuni, K., Ikeda, W., Fujito, T., Morimoto, K., Takeuchi, M., Monden, M., and Takai, Y.
	7.ADIP, a novel Afadin- and alpha-actinin-binding protein localized at cell-cell adherens junctions. （査読付）	共	平成 15 年２月	The Journal of Biological Chemistry 第 278 巻第６号	p 4103 ～ p 4111	新しい afadin 結合タンパク質を同定し、ADIP と命名した。ADIP は 615 アミノ酸から構成され、３つのコイルドコイルドメインを有している。細胞の免疫染色により ZO-1 とは局在が一致せず、afadin と局在が一致することから Adherens junction に局在していることが考えられる。さらに詳細な局在を確認する目的で、小腸組織を用いた免疫電子顕微鏡解析を行ったところ、Adherens junction に局在していることが明らかとなった。 Asada, M., Irie, K., Morimoto, K., Yamada, A., Ikeda, W., Takeuchi, M., and Takai, Y.
	8.Tage4/Nectin-like molecule-5 heterophilically trans-interacts with cell adhesion molecule nectin-3 and enhances cell migration. （査読付）	共	平成 15 年７月	The Journal of Biological Chemistry 第 278 巻第 30 号	P28167 ～ p 28172	Nectin と同様のドメイン構造を有している Tage-4/Necl-5 が結腸癌において過剰発現する遺伝子であることが報告されているが、作用については明らかとなっていない。そこで本研究では、Tage-4/Necl-5 が V12Ras-NIH3T3 細胞の運動性を増強させ、癌細胞の悪性化に何らかの形で関与していることが明らかとなった。 Ikeda, W., Kakunaga, S., Itoh, S., Shingai, T., Takekuni, K., Satoh, K., Inoue, Y., Hamaguchi, A., Morimoto, K., Takeuchi, M., Imai, T., and Takai, Y.
	9.Implication	共	平成 15	The	p 35421	今まで Ca2+非依存性免疫グロブリ

	s of nectin-like molecule-2/IGSF4/RA175/SgIGSF/TSLC1/SynCAM1 in cell-cell adhesion and transmembrane protein localization in epithelial cells. （査読付）		年９月	Journal of Biological Chemistry 第 278 巻 第 37 号	～ p 35427	ン様細胞間接着分子である４つのネクチンが同定されており、今回新たに 5 つ目のネクチン様分子を同定し、Necl-2 と命名した。Necl-2 は afadin と結合しないが、Lin-7 や Pals2 と結合し、Let-23 タンパク質の適切な局在化に関与することが明らかとなった。 Shingai, T., Ikeda, W., Kakunaga, S., Morimoto, K., Takekuni, K., Itoh, S., Satoh, K., Takeuchi, M., Imai, T., Monden, M., and Takai, Y.
	10. Nectin-like molecule-5/Tage4 enhances cell migration in an integrin-dependent, Nectin-3-independent manner. （査読付）	共	平成 16 年４月	The Journal of Biological Chemistry 第 279 巻 第 17 号	p 18015 ～ p 18025	結腸癌において過剰発現する遺伝子 Necl-5 が、血清および血小板由来増殖因子によって誘導され、さらにインテグリと依存的に、Nectin-3 と非依存的に細胞遊走を促進することが明らかとなった。また、V12Ras-NIH3T3 細胞を用いたマウス肺転移実験により、Necl-5 の細胞内領域を欠いた遺伝子を過剰発現させた細胞では、転移を抑制した。これらの結果から細胞内領域が癌の増殖・転移に大きく関与していることが明らかとなった。 Ikeda, W., Kakunaga, S., Takekuni, K., Shingai, T., Satoh, K., Morimoto, K., Takeuchi, M., Imai, T., and Takai, Y.
	11. Involvement of LMO7 in the association of two cell-cell adhesion molecules, nectin and E-cadherin, through afadin and alpha-actinin in epithelial cells. （査読付）	共	平成 16 年７月	The Journal of Biological Chemistry 第 279 巻 第 30 号	p 31365 ～ p 31373	afadin およびαアクチニン結合タンパク質として、ヒト LIM ドメインを７つ有する分子を同定し、LMO7 と命名した。LMO7 は LMO7a と LMO7b とファミリーがあり、それぞれ 1729、395 アミノ酸から構成されている。またカルポニン相同性、PDZ、および LIM ドメインを有し、免疫電子顕微鏡法を用いた解析により、胆嚢上皮細胞の Adherens junction と Apical membrane に局在していることが明らかとなった。 Ooshio, T., Irie, K., Morimoto, K., Fukuhara, A., Imai, T., and Takai, Y.
	12. Endocytosi	共	平成 16	The	p 237～	E-カドヘリンは、Adherens junction

	s of E-cadherin regulated by Rac and Cdc42 small G proteins through IQGAP1 and actin filaments. （査読付）		年７月	Journal of Cell Biology 第166巻第２号	p 248	（AJ）における重要な細胞間接着分子であり、AJが細胞外シグナルの作用によって破壊されるとE-カドヘリンがエンドサイトーシスを受けることが報告されている。しかし、そのメカニズムについては不明であった。本研究では、このエンドサイトーシスのメカニズムを解明するために、ラット肝臓からAJ濃縮画分を採取し、実験を行った。結果、E-カドヘリンベースのAJ構成および維持においてRac/ Cdc42 - IQGAP1システムが重要な役割を果たしていることが明らかとなった。 Izumi, G., Sakisaka, T., Baba, T., Tanaka, S., Morimoto, K., and Takai, Y.
	13.Contacts between the commissural axon and the floor plate cells are mediated by nectins and involved in axonal pathfindings in the mouse floor plate （査読付）	共	平成16年９月	Developmental Biology 第273巻第２号	p 244～p 256	免疫蛍光染色法により、免疫グロブリン様細胞間接着分子であるNectin-1と-3が交連神経の軸索と神経管の最腹側領域の底板の細胞に発現していることが明らかとなり、また、免疫電子顕微鏡法を用いた詳細な解析の結果、交連神経の軸索にNectin-3が発現し、神経管の最腹側領域の底板の細胞にNectin-1が発現し、ヘテロに結合していることが明らかとなった。 Okabe, N., Shimizu, K., Ozaki-Kuroda, K., Nakanishi, H., Morimoto, K., Takeuchi, M., Katsumaru, H., Murakami, F., and Takai, Y.
	14.Role of cell adhesion molecules nectin-1 and -3 in the ciliary body development. （査読付）	共	平成17年４月	Development 第132巻第７号	p 1525～p 1537	Nectin-1、-3ノックアウトマウスの病理学的解析を行ったところ、毛様体上皮の色素細胞層と非色素細胞層が分離し、小眼球症を示した。また、免疫電子顕微鏡法による詳細な解析を行ったところ、非色素上皮細胞にNectin-1、色素上皮細胞にNectin-3がそれぞれ発現し、ヘテロに結合していることがわかった。以上の結果からNectin-1、-3ノックアウトマウスでは、それぞれの接着が阻害されることで、小眼球症になることが明らかとなった。 Inagaki, M., Irie, K., Ishizaki, H., Tanaka-Okamoto, M., Morimoto,

様式第４号（教員個人に関する書類）

						K., Inoue, E., Ohtsuka, T., Miyoshi, J., and Takai, Y.
	15.Expression of nectin-2 in mouse granulose cells. （査読付）	共	平成 17 年 7 月	European Journal of Obstetrics & Gynecology and Reproductive Biology 第 121 巻 第 1 号	p 71～p 76	卵胞の発達と成熟には、細胞間接着システムが重要であり、最近の研究で、Nectin が発現していることが報告されている。そこで本研究において免疫電子顕微鏡法を用いて詳細な解析を行ったところ、Nectin-2 が顆粒細胞同士の接着、顆粒細胞と透明帯の微絨毛の接着に関与していることが明らかとなった。 Kawagishi, R., Takahara, M., Morishige, K., Sakata, M., Tasaka, K., Ikeda, W., Morimoto, K., Takai, Y., and Murata, Y.
	16.Migrating postmitotic neural precursor cells in the ventricular zone extend apical processes and form adherens junctions near the ventricle in the developing spinal cord. （査読付）	共	平成 17 年 7 月	Neuroscience Research 第 52 巻 第 3 号	p 250～ p 262	リアルタイム PCR 法を用いて Neph3 が mouse embryonic day12(E12)に特異的に脳で発現していること、in situ Hybridization 法により、E10.5 、E12.5 、E14.5 の spinal cord に発現していることが明らかとなった。また、免疫電子顕微鏡法を用いて詳細な局在解析を行ったところ Adherens junction に局在していることが明らかとなった。 Minaki, Y., Mizuhara, E., Morimoto, K., Nakatani, T., Sakamoto, Y., Inoue, Y., Satoh, K., Imai, T., Takai, Y. and Ono, Y.
	17.Requirement of nectin, but not cadherin, for formation of claudin-based tight junctions in annexin II-knockdown MDCK cells. （査読付）	共	平成 18 年 8 月	Oncogene 第 25 巻 第 37 号	p 5085 ～ p 5102	先行研究の報告では、細胞間接着には Cadherin が主要分子であると報告されている。そこで、我々は Cadherin ベースの細胞間接着を阻害する Annexin Ⅱノックダウン MDCK 細胞を用いた実験により、Tight junction の形成には、Cadherin ではなく、Adherens junction 構成分子である Nectin、afadin ベースの細胞間接着が重要であることが明らかとなった。 Yamada, A., Fujita, N., Sato, T., Okamoto, R., Ooshio, T., Hirota, T., Morimoto, K., Irie, K., and Takai, Y.

	18.Low LATS2 mRNA level can predict favorable response to epirubicin plus cyclophosphamide, but not to docetaxel, in breast cancers. （査読付）	共	平成 19 年 8 月	Journal of Cancer Research & Clinical Oncology 第 133 巻 第 8 号	p 501～ p 509	術前化学療法においてエピルビシン＋シクロホスファミド（EC）またはドセタキセルを投与した再発乳癌組織を用いて LATS1、LATS2 の mRNA の発現を調べた。その結果、腫瘍内で低 LATS 2 mRNA レベルを有する患者は、高 LATS 2 mRNA レベルを有する患者よりも EC 治療に対して有意に高い奏効率を示した。よって、LATS2mRNA の発現を調べることは、EC 術前化学療法の治療に対する予測因子となりえることが示唆された。 Takahashi, Y., Miyoshi, Y., Morimoto, K., Taguchi, T., Tamaki, Y., and Noguchi, S.
	19.Interaction of cancer cells with platelets mediated by Necl-5/poliovirus receptor enhances cancer cell metastasis to the lungs. （査読付）	共	平成 20 年 1 月	Oncogene 第 264 巻 第 3 号	p 264～ p 273	癌組織で高発現している Necl－5 が、癌の悪性度に関与しているかは不明であった。本研究において癌の悪性度と関わりが深い、転移に着目し、CT26 癌細胞肺転移モデルマウスを用いてメカニズムの解明を行った。その結果、癌細胞で発現している Necl－5 が、血小板で発現している CD226 と結合することで、血小板凝集を引き起こし、血栓を作ることで、癌細胞を肺転移しやすくしていることが明らかとなった。 Morimoto, K., Satoh-Yamaguchi, K., Hamaguchi, A., Inoue, Y., Takeuchi, M., Okada, M., Ikeda, W., Takai, Y., and Imai, T.
	20.Stem cell marker aldehyde dehydrogenase 1-positive breast cancers are characterized by negative estrogen receptor, positive human epidermal growth factor receptor type 2, and high	共	平成 21 年 6 月	Cancer Science 第 100 巻 第 6 号	p 1062 ～ p 1068	乳癌において癌幹細胞のマーカーである ALDH1 陽性細胞の特徴を調べるために、免疫染色法を用いて、エストロゲン受容体（ER）、ヒト上皮成長因子受容体タイプ 2（HER2）、増殖マーカー（Ki67）の発現を比較した。結果、先行の報告通り、ALDH1 陽性乳癌組織において、ER 細胞は、ER（－）、HER2（＋）、Ki67（＋）の特徴を示すことが確認された。しかしながら、二重免疫染色法を用いて個々の癌細胞レベルを調べたところ、ER（－）、HER2（＋）、Ki67（－）の特徴であることが明らかとなった。さらに、ALDH1 陽性乳癌細胞の周辺に Ki67 陽性乳癌細胞が分布し

	Ki67 expression.（査読付）					ていることが明らかとなった。Morimoto, K., Kim, S.J., Tanei, T., Shimazu, K., Tanji, Y., Taguchi, T., Tamaki, Y., Terada, N., and Noguchi, S.
	21.Association of Breast Cancer Stem Cells Identified by Aldehyde Dehydrogenase 1 Expression with Resistance to Sequential for Brest Cancers.（査読付）	共	平成 21 年 6 月	Clinical Cancer Research 第 15 巻第 12 号	p 4234 ～ p 4241	先行研究で、乳癌の癌幹細胞のマーカーとして CD44 (+) / CD24 (-) が知られており、予後予測因子となり得るとの報告があった。本研究において、既存の癌幹細胞のマーカーである CD44 (+) / CD24 (-) の発現と新たな候補として ALDH1 の発現とを免疫染色法を用いて、化学療法前後における発現変化と予後との相関を調べた。結果、CD44 (+) / CD24 (-) では相関がなく、ALDH1 陽性乳癌幹細胞が化学療法に対して抵抗性を示すことが明らかとなった。よって、CD44 (+) / CD24 (-) よりも ALDH1 の発現が予後予測因子のマーカーになることが示唆された。Tanei, T., Morimoto, K., Shimazu, K., Kim, S.J., Tanji, Y., Taguchi, T., Tamaki, Y., and Noguchi, S.
	22.Enhanced expression of Annexin A4 in clear cell carcinoma of the ovary and association with chemoresistance to carboplatin.（査読付）	共	平成 21 年 11 月	International Journal of Cancer 第 125 巻第 10 号	p 2316 ～ p 2322	卵巣癌において新たな創薬のターゲットになる分子を同定する目的で、抗癌剤抵抗性を示し、予後不良である明細胞腺癌を用いて、二次元電気泳動法、リアルタイム PCR 法、ウエスタンブロッティング法によるスクリーニングを行った。結果、annexinⅣを同定した。また、ＭＴＴアッセイ、免疫染色法により、annexinⅣが卵巣癌の化学療法抵抗性に関与することが明らかとなった。よって、annexinⅣが悪性度の高い卵巣明細胞腺癌の患者において化学療法抵抗性の新規治療標的となることが示唆された。Kim, A., Enomoto, T., Serada, S., Ueda, Y., Takahashi, T., Ripley, B., Miyatake, T., Fujita, M., Lee, C.M., Morimoto, K., Fujimoto, M., Kimura, T., and Naka, T.
	23.Predictive factors for anthracycline	共	平成 22 年 4 月	Breast cancer 第 17 巻	p 103～ p 109	アントラサイクリンベースの治療を用いた既存の報告によると、ヒト上皮成長因子受容体 2 型（HER2）陽性

	-based chemotherapy for human breast cancer.（査読付）			第2号		腫瘍の予後が改善されたが、HER2陰性腫瘍の予後は改善されない、HER2とアントラサイクリン感受性との間には関係がないことが知られている。また、アントラサイクリンの分子標的であるTOP2A遺伝子の過剰発現は、HER2増幅腫瘍に頻繁に発生していることから、アントラサイクリンベースの治療が直接的にHER2に作用したのではなく、アントラサイクリンの分子標的であるTOP2Aに作用し、間接的にHER2に作用していることが示唆された。また、TOP2A陽性およびBRCA1陰性が術前エピルビシン含有レジメンで治療した場合に有意に高い病理学的完全寛解を示すことから、これらを併用することで治療効果が上がることが示唆された。]Miyoshi, Y., Kurosumi, M., Kurebayashi, J., Matsuura, N., Takahashi, M., Tokunaga, E., Egawa, C., Masuda, N., Kono, S., Morimoto, K., Kim, SJ., Okishiro, M., Yanagisawa, T., Ueda, S., Taguchi, T., Tamaki, Y., Noguchi, S.
	24.Dermokine as a novel biomarker for early-stage colorectal cancer.（査読付）	共	平成22年12月	Journal of Gastroenterology 第45巻第12号	p 1201～p 1211	先行研究でケラチノサイトによって分泌されるペプチドとしてDermokine (DK) の報告があるが、癌との関わりについての報告がない。そこで本研究においてDK-β/γが結腸直腸腫瘍において発現していることを明らかにし、初期の段階から発現していることを見出した。また、血清中において、DK-β/γ単遺伝子の発現だけではなく、既存の腫瘍マーカーであるCEA/CA19-9/p53と組み合わせるとより初期癌の検出率が向上することを見出した。これらの結果から複数の癌マーカーとDK-β/γの発現を組み合わせることで、通常見つけることが困難である大腸癌初期の診断マーカーとなることが示唆された。 Tagi, T., Matsui, T., Kikuchi, S., Hoshi, S., Ochiai, T., Kokuba, Y., Kinoshita-Ida, Y., Kisumi-Hayashi, F., Morimoto, K.,

						Imai, T., Imoto, I., Inazawa, J., Otsuji, E.
	25.Cell surface biotinylation by azaelectrocyclization: easy-handling and versatile approach for living cell labeling （査読付）	共	平成 24 年５月	Bioorganic & medicinal chemistry 第 20 巻第６号	p1865 ～ p 1868	先行研究で、独自に開発した高速 6π-アザ電子環状反応を用いて、細胞表層上のアミノ基へ効率的に蛍光標識する方法を確立した。本研究では、汎用的な生細胞標識法として確立することを目的として、電子環状反応によるビオンチン修飾を行い、次いで、標識抗体やアビジン処理による 2 段階の手法を用いて特定の分子を可視化することを検討した。この 2 段階の手法を用いることにより、様々な蛍光基や機能性分子と複合化させることができ、さらに市販抗体やアビジンを使用することで、様々な分子を簡便に標識し可視化できることが期待される。 Tanaka K., Yoko,i S., Morimoto K., Iwata T., Nakamoto Y., Nakayama K., Koyama K., Fujiwara T., Fukase K.
	26.Dynein and dynactin components modulate neurodegeneration induced by excitotoxicity （査読付）	共	平成 24 年７月	Journal of Neurochemistry 第 122 巻第１号	p162 ～ p 174	神経変性疾患ではタンパク質の神経細胞への異常な蓄積によって引き起こされるものが多く、さらに変性した軸索では、spheroid 球体が観察される事が知られている。我々は、ラット海馬神経細胞を用いたグルタミン酸毒性により、軸索に spheroid 球体を形成させて軸索を変性させる初代培養系を確立し、軸索輸送に関係する Dynein-Dynactin 複合体の中で、p150Glued がグルタミン酸毒性により C 末端領域が切断されることで軸索変性が起こり、さらには、細胞体の死をも促進することを明らかにした。よって神経変性疾患のメカニズムのひとつとして軸索輸送機能の低下が関与していることが示唆された。 Fujiwara T., Morimoto K., Kakita A., Takahashi H.
	27.Cooperative effect of p150Glued and microtubule stabilization	共	平成 24 年７月	Biochemical and Biophysical Researc	p82～p 88	先行研究で、グルタミン酸興奮毒性が慢性神経疾患及び急性の中枢神経系傷害に関与し、軸索を含む神経変性を引き起こすこと、軸索輸送関連分子 p150Glued が、グルタミン酸毒

	to suppress excitotoxicity-induced axon degeneration （査読付）			h Communications 第424巻第82号		性によりC末端領域が切断されることで、軸索変性が起こすことが報告されている。我々は、ラット海馬初代培養系を用い、p150Glued の過剰発現系を作製し軸索変性を抑制することを見出した。さらに軸索構成分子である微小管を安定させることで、協働して軸索変性を抑制することを見出した。 Fujiwara T., Morimoto K.
	28.Methylated DNA and Total DNA in Serum Detected by One-Step Methylation-Specific PCR Is Predictive of Poor Prognosis for Breast Cancer Patients （査読付）	共	平成24年9月	Oncology 第5巻第5号	p273～p 282	我々は、高感度で血清中のメチル化DNA を検出することができるワンステップメチル化特異的PCR 測定法を開発した。そこで、乳癌患者の血清中メチル化DNA の検出に、このワンステップメチル化特異的PCR 測定法を適用し、検討した結果、血清中のメチル化DNA 量の多い群では、有意に予後が悪い事が明らかとなり、さらに血清中の全DNA 量と組合せることで、より有意に乳癌患者の予後を予測する可能性が示唆された。 Fujita N., Nakayama T., Yamamoto N., Kim S.J., Shimazu K., Shimomura A., Maruyama N., Morimoto K., Tamaki Y., Noguchi S.
	29.Inhibition of p53 transactivation functionally interacts with microtubule stabilization to suppress excitotoxicity-induced axon degeneration （査読付）	共	平成24年10月	Biochemical and Biophysical Research Communications 第427巻第1号	p100～p 106	最近の研究で、微小管とDynein-Dynactin 複合体の安定化が、興奮毒性によって誘発される軸索変性を調節することを見出したが、微小管ベースの分子メカニズムはよくわかっていない。そこでDynein-Dynactin 複合体によって運ばれるミトコンドリア輸送に着目し、p53 のトランス活性化および微小管安定化機能を阻害すると、興奮毒性によって誘導されるミトコンドリア機能障害を協調的に抑制することを明らかにした。 Fujiwara T., Morimoto K.
	30.Dermokine expression in intraductal papillary-mucinous neoplasm and invasive	共	平成24年10月	Anticancer research 第32巻第10号	p4405～p 4412	血清Dermokine は、早期大腸癌のための新たなバイオマーカーである。我々は、免疫染色法を用いて膵管内乳頭粘液性腫瘍と浸潤性膵癌における発現解析を行った。その結果、従来のバイオマーカーと血清

	pancreatic carcinoma （査読付）					Dermokine と組み合わせることにより、膵管内乳頭粘液性腫瘍と浸潤性膵臓癌における潜在的な新たなバイオマーカーとなることが示唆された。 Watanabe K., Ochiai T., Kikuchi S., Kumano T., Matsui T., Morimoto K., Yasukawa S., Nakamori S., Sasako M., Yanagisawa A., Otsuji E.
	31.Intratumoral regulatory T cells as an independent predictive factor for pathological complete response to neoadjuvant paclitaxel followed by 5-FU/epirubicin/cyclophosphamide in breast cancer patients （査読付）	共	平成 24 年 11 月	Breast Cancer Research And Treatment 第 136 巻第 1 号	p107 ～ p 116	抗腫瘍免疫は、乳癌の化学療法感受性において重要な役割を果たしていると考えられている。我々は、細胞増殖 Ki67、腫瘍内浸潤 FOXP3+制御性 T 細胞、CD8+細胞傷害性 T 細胞および IL17F+ヘルパーT 細胞が、術前化学療法の病理学的完全奏効と関連しているどうかを調べた。その結果、乳癌の化学療法の感受性には、細胞増殖と腫瘍免疫（制御性 T 細胞、細胞障害性 T 細胞）が関与していること、また、FOXP3 と Ki67 の組み合わせが臨床的に有用な化学療法効果予測因子になる可能性が示唆された。 Oda N., Shimazu K., Naoi Y., Morimoto K., Shimomura A., Shimoda M., Kagara N., Maruyama N., Kim S.J., Noguchi S.
	32.A compound CP-31398 suppresses excitotoxicity-induced neurodegeneration （査読付）	共	平成 25 年 10 月	Biochemical and Biophysical Research Communications 第 440 巻第 3 号	p359 ～ p 363	CP-31398 は、腫瘍抑制タンパク質 p53 の変異形の構造および機能を回復させることで知られており、本研究により興奮毒性と強い相関を持つミトコンドリア機能障害を抑制することが明らかとなった。これらの結果から、グルタミン酸興奮毒性によって誘発される神経変性の新規調節因子として機能することができる化合物の可能性が示唆された。 Fujiwara T., Morimoto K.
	33.Clinicopathological Analysis of Breast Ductal Carcinoma in situ with		平成 25 年 10 月	Oncology 第 85 巻第 4 号	p248 ～ p 256	浸潤性乳癌において ALDH1 陽性癌幹細胞の特徴は、ER 陰性、PR 陰性、HER2 陽性、Ki67 陽性の病理学的特徴を有していることが知られているが、今回、非浸潤性乳癌においても同一の特徴を有していることが明らかとな

	ALDH1-Positive Cancer Stem Cells （査読付）					った。 Tsukabe M., Shimazu K., Morimoto K., Naoi Y., Kagara N., Shimoda M., Shimomura A., Maruyama N., Kim S.J., Noguchi S.
	34.Development of bis-unsaturated ester aldehydes as amino-glue probes: sequential double azaelectrocyclization as a promising strategy for bioconjugation （査読付）	共	平成 25 年 11 月	Organic & biomolecular chemistry 第 11 巻第 42 号	p7326 ～ p 7333	これまでに開発したアミノ基との高速アザ電子環状反応、および sym-ジベンゾ-1,5-シクロオクタジエン-3,7-ジイン（Sondheimer diyne）を用い、二重クリック反応を併せて用いることにより、様々な生体分子に適用可能な効率良い複合化法を開発した。この得られたプローブを用いて、様々なペプチドや複雑な構造を持つ N-結合型糖ペプチドを生細胞上に高効率的に標識することに成功した。 Tanaka K., Nakamoto Y., Siwu E.R., Pradipta A.R., Morimoto K., Fujiwara T., Yoshida S., Hosoya T., Tamura Y., Hirai G., Sodeoka M., Fukase K.
	35. Methylated DNA and high total DNA levels in the serum of patients with breast cancer following neoadjuvant chemotherapy are predictive of a poor prognosis （査読付）	共	平成 26 年 4 月	Oncology letters 第 8 巻第 1 号 p397 ～ p 403	p397 ～ p 403	先行の研究で、メチル化 DNA および血清中の全 DNA 濃度を検出するためのワンステップメチル化特異的 PCR 測定法アッセイを確立した。本研究では、術前化学療法後乳癌患者血清中のメチル化DNAと全DNAを測定し、いずれも乳癌の独立した予後予測因子として有用である事が示唆された。 Fujita N., Kagara N., Yamamoto N., Shimazu K., Shimomura A., Shimoda M., Maruyama N., Naoi Y., Morimoto K., Oda N., Kim S.J., Noguchi S.
	36.Overexpression of EphrinA2 receptors in cancer stromal cells is a prognostic factor for the relapse of gastric cancer （査読付）	共	平成 26 年 8 月	Gastric Cancer 第 18 巻第 3 号	P485 ～ p 494	進行胃癌は予後不良であり、化学療法や放射線治療のみでは十分に予後を改善することは困難である。また胃癌の特徴として、癌細胞自身と癌間質細胞反応など多様性がある。我々は、癌間質反応に着目し、プロテオーム解析と RNA マイクロアレイ解析を行い、再発リスクの高い症例における特異的分子の網羅的解析と臨床病理学的所見と併せて解析を行った。その結果 EphrinA2 受容体が胃

						癌浸潤部で特徴的に発現すると、再発リスクが陰性例に比して有意に高いことが示唆された。 Kikuchi S., Kaibe N., Morimoto K., Fukui H., Niwa H., Maeyama Y., Takemura M., Matsumoto M., Nakamori S., Miwa H., Hirota S., Sasako M.
	38.Visualizing Trimming Dependence of Biodistribution and Kinetics with Homo- and Heterogeneous N-Glycoclusters on Fluorescent Albumin （査読付）	共	平成 28 年 6 月	Scientific report	10.1038/srep21797	独自に開発した 6π-アザ電子環状反応を利用して、2 種類の糖鎖を含む不均一な糖鎖クラスターを効率的に合成することに成功しました。これら糖鎖クラスターの挙動をマウス内で詳しく解析することにより、糖鎖構造によって糖鎖の排出経路や臓器細胞選択的な集積を高度に制御できることを見出しました。また今回開発したアルブミン糖鎖クラスターは、生体内での様々な器官や癌を代表とする疾患部位に対するドラッグデリバリーシステムとして、今後、創薬研究や医療診断分子の開発に貢献すると期待できます。 Akihiro Ogura., Tsuyoshi Tahara., Satoshi Nozaki., Koji Morimoto., Yasuhiko Kizuka., Shinobu Kitazume., Mitsuko Hara., Soichi Kojima., Hirotaka Onoe,Almira Kurbangalieva., Naoyuki Taniguchi., Yasuyoshi Watanabe., Katsunori Tanaka
	39.Tumor size and proliferative marker geminin rather than Ki67 expression levels significantly associated with maximum uptake of 18F-deoxyglucose levels on positron emission tomography for	共	平成 29 年 7 月	PLoS One 第12巻9号	e0184508	浸潤性乳癌組織を用いて S6K（ribosomal protein S6 kinase)、pMAPK(Phospho p44/42 MAPK)、TP53、増殖マーカーである geminin および Ki67 の発現レベルを免疫染色法を用いて調べ、SUV-max レベルと比較検討した。その結果 SUVmax レベルは、pS6 陽性、TP53 陽性では傾向が見られ、geminin においては有意に高かったが、pMAPK の発現レベルと SUVmax レベルとの間に有意な関連はなかった。結論として、増殖マーカーである Ki67 よりもむしろ geminin 高値を有する乳癌が、高レベルの SUVmax と有意に関連することを明らかとなった。これらの知見は、SUVmax が高い増殖活性を有する

	breast cancers. （査読付）					腫瘍特性を反映するが、S6K および MAPK 経路の活性化または TP53 の機能不全によるグルコース代謝の増加を反映しないことを意味している。 Nishimukai A., Inoue N., Kira A., Takeda M., Morimoto K., Araki K., Kitajima K., Watanabe T., Hirota S., Katagiri T., Nakamori S., Akazawa K., Miyoshi Y
	40.お菓子の今昔物語 （研究ノート） （査読付）	共	平成 30 年 3 月	大阪女子短期大学紀要 第 42 号	p41 ～ p46	日本の伝統的なお菓子は、原材料や日持ちの問題から素朴で甘いお菓子が中心だったが、西洋の文化が流入し、目にしたことの無い様々な食材が紹介され、日本文化と融合し形態や味覚とともにその物の役割も変化してきた。過去における菓子の流行は、その時代の食文化や産業、技術などの状況を鮮明に映し出し、さらには、日本人が何を望み必要としていたか、食文化を振り返ることと食品の特性を知ることによって時代が必要としたお菓子の存在を知ることが出来る。 髙坂廣志、盛本浩二
	41.Periostin blockade overcomes chemoresistance via restricting the expansion of mesenchymal tumor subpopulations in breast cancer. （査読付）	共	平成 30 年 5 月	Scientific Report 第 8 巻 1 号	Article number：4013	治療法が確立されていないトリプルネガティブ乳癌の新規治療法として既存の化学療法と今回開発したペリオスチン中和抗体の併用療法を行うことで腫瘍縮小効果があることが明らかとなった。また、ペリオスチン中和抗体は、乳癌の上皮間葉転換を抑制し原発巣の化学療法後の再発を著明に抑制した。以上の結果からペリオスチン中和抗体が、新たな分子標的治療薬として今後乳癌の治療に期待されることが示唆された。 Nakazawa Y.,Taniyama Y.,Sanada F.,Morishita R.,Nakamori S., Morimoto K.,Yeung KT., Yang J
	42.Cascade reaction in human live tissue allows clinically applicable	共	平成 31 年 1 月	Advanced Science 第 6 巻 2 号	Article number：1801479	先行研究で、酸化ストレス条件下で、細胞で発生するアクロレインが、蛍光基を持つアジドプローブと有機合成反応し、細胞を蛍光標識できることが報告されている。本研究において、この反応系を用いることで、様々

	diagnosis of breast cancer morphology （査読付）					なヒト癌細胞でアクロレインが多量に発生していることを明らかにした。さらに、乳癌手術で摘出した生の組織に、この手法を適用したところ、わずか数分で97%の高感度で癌細胞の有無を判別し、かつ様々な種類の乳癌を識別することに成功した。今後、乳癌切除範囲を迅速・簡易・安価に判断する世界基準の診断技術として活用されるとが示唆された。 Tanei T., Pradipta A R., Morimoto K., Fujii M., Arata M., Ito A., Yoshida M., Saigitbatalova E., Kurbangalieva A., Ikeda J.-I., Morii E., Noguchi S., Tanaka K
	43.Tetramethylrhodamine is an essential scaffold of azide probe in detecting cellular acrolein. （査読付）	共	平成31年1月	Bioorganic & medicinal chemistry 第27巻11号	P2228～p2234	先行研究で、TAMRA標識-フェニルアジドが、生細胞の細胞内アクロレインを直接検出するために使用される化学プローブであることが報告されている。本研究において、腫瘍のサブタイプに関係なく、高レベルのアクロレインが様々な乳癌細胞で生成されることを TAMRA 標識-フェニルアジドを用いて明らかにした。これらの知見は、乳癌患者から切除した乳癌組織を TAMRA 標識-フェニルアジドを用いて標識した以前の報告に示されたものを裏付けるものである。 Pradipta AR., Fujii M., Tanei T., Morimoto K., Shimazu K., Noguchi S., Tanaka K
	44.Emerging Technologies for Real-Time Intraoperative Margin Assessment in Future Breast-Conserving Surgery （査読付）	共	令和元年3月	Advanced Science.	doi.org/10.1002/advs.201901519	乳癌の術中迅速診断には一般的に利用されている病理学的診断や様々な診断法が開発されてきた。それらについて要約し、各診断方法の長所と短所についてまとめています。その結果、今後の診断について乳癌組織からの病理学的データを AI アルゴリズムで分析することや新しい診断技術と AI アルゴリズムを組み合わせて使用することでより正確な診断ができる。 Ambara R. Pradipta., Tomonori Tanei., Koji Morimoto., Kenzo Shimazu., Shinzaburo Noguchi., and Katsunori Tanaka

様式第４号（教員個人に関する書類）

	45.Significant association between high serum CCL5 levels and better disease-free survival of patients with early breast cancer. （査読付）	共	令和２年１月	Cancer Science 第111巻1号	P209～p 218	癌免疫反応に関与する CCL5 について、乳癌患者の血清、癌細胞、間質細胞中の mRNA 量における発現を調べた。 血清中の CCL5 高発現患者は、低発現の患者より有意に無病生存率が良好であった。しかし、癌細胞では、CCL5 発現の低い方が無病生存率が有意に良好であった。さらに癌組織について mRNA レベルで詳細な解析を行ったところ、血清中の CCL5 レベルは癌組織とは相関せず、間質細胞と相関した。以上の結果から血清 CCL5 は、癌細胞ではなく間質細胞に由来すること、血清中 CCL5 が予後の予測因子となることが示唆された。 Fujimoto Y, Inoue N, Morimoto K, Watanabe T, Hirota S, Imamura M, Matsushita Y, Katagiri T, Okamura H, Miyoshi Y.
	46.The second-generation click-to-sense probe for intraoperative diagnosis of breast cancer tissues based on acrolein targeting （査読付）	共	令和４年３月	Bulletin of the Chemical Society of Japan. 第95巻3号	p421～p426	がん細胞などの酸化ストレスの多い細胞で高発現するアクロレインを標的とした蛍光プローブによる癌細胞の可視化に基づくクリック・ツー・センス(CTS)プローブについて2,6-ジイソプロピルフェニルアジドがフェニルアジドよりもアクロレインに対して反応性が高いことを発見し、より感度・特異度の高い第二世代の CTS プローブを開発した。 A. R. Pradipta, H. Michiba, A. Kubo, M. Fujii, T. Tanei, K. Morimoto, K. Shimazu, K. Tanaka
	47.Comparison of click-to-sense assay with frozen section analysis using simulated surgical margins in breast cancer patients （査読付）	共	令和４年７月	European journal of surgical oncology. 第48巻7号	p1520～p1526.	アクロレインを標的とした蛍光プローブによる癌細胞の可視化に基づく「クリック・ツー・センス」(CTS)アッセイが、乳房の悪性病変と良性病変を区別することが可能であることを我々の先行研究で報告している。本研究において、乳癌術中断端迅速診断の際に実施する通常の凍結切片を用いた診断と CTS 法を用いた診断とを比較した結果、ほぼ同等の診断実績であることがわかった。今後の乳癌術中迅速診断に CTS 法を用いることで、手間と時間を短縮することできることが示唆された。

様式第４号（教員個人に関する書類）

						Anna Kubo , Tomonori Tanei , Ambara R Pradipta , Koji Morimoto , Motoko Fujii , Yoshiaki Sota , Tomohiro Miyake , Naofumi Kagara , Masafumi Shimoda , Yasuto Naoi , Yuichi Motoyama , Eiichi Morii , Katsunori Tanaka , Kenzo Shimazu
	（その他） 学会発表１ Rho GDI α／β ダブルノックアウト（DKO）マウスの表現型解析 （査読付）	共	平成 14 年 12 月	第 25 回日本分子生物学会（於：筑波大学先端学際領域研究センター）		石崎宏好、戸川　温、岡本三紀、濱口晶子、盛本浩二、大塚稔久、今井俊夫、高井義美、三好　淳
	学会発表２ Nectin-like protein-1, -2, -3 の性状解析 （査読付）	共	平成 14 年 12 月	第 25 回日本分子生物学会（於：筑波大学先端学際領域研究センター）		池田わたる、角永茂樹、伊藤晋平、竹國恭司、盛本浩二、佐藤啓子、竹内勝一、今井俊夫、高井義美
	学会発表３ 外分泌腺特異的 TJ 分子である JEAP2 の性状解析 （査読付）	共	平成 14 年 12 月	第 25 回日本分子生物学会（於：筑波大学先端学際領域研究センター）		盛本浩二、竹内勝一、西村美由希、井上陽子、尾野雄一、今井俊夫、高井義美
	学会発表４ GFP 融合蛋白質の局在を指標にした新規タイトジャンクション蛋白質	共	平成 14 年 12 月	第 25 回日本分子生物学会（於：筑波大学		西村美由希、浅野（柿崎）真由美、尾野雄一、盛本浩二、竹内勝一、井上陽子、今井俊夫、高井義美

	JEAP の同定 （査読付）			先端学際領域研究センター）		
	学会発表 4 GFP 融合蛋白質の局在を指標にした新規タイトジャンクション蛋白質 JEAP の同定 （査読付）	共	平成 14 年 12 月	第 25 回日本分子生物学会（於：筑波大学先端学際領域研究センター）		西村美由希、浅野（柿崎）真由美、尾野雄一、盛本浩二、竹内勝一、井上陽子、今井俊夫、高井義美
	学会発表 5 Pre-embedding 免疫電子顕微鏡法による tight junction 構成分子の解析 （査読付）	共	平成 15 年 4 月	第 19 回医学生物学電子顕微鏡技術学会（於：東京慈恵会医科大学）		盛本浩二、竹内勝一、西村美由希、井上陽子、尾野雄一、今井俊夫、高井義美
	学会発表 6 ネクチン様分子 Necl-2/TSLC1/SynCAM1：細胞間接着装置以外の側-基底細胞膜部位への局在と Pals2 の結合 （査読付）		平成 15 年 9 月	第 62 回日本癌学会総会（於：愛知県立がんセンター）		真貝竜史、池田わたる、角永茂樹、竹國恭司、盛本浩二、佐藤啓子、竹内勝一、今井俊夫、高井義美
	学会発表 7 ネクチン(4)：PAR-3 を介した上皮細胞の極性形成におけるネクチンの新しい機能 （査読付）	共	平成 15 年 9 月	第 62 回日本癌学会総会（於：愛知県立がんセンター）		藤戸努、池田わたる、竹國恭司、盛本浩二、竹内勝一、高井義美
	学会発表 8 ネクチン様分	共	平成 15 年 9 月	第 62 回日本癌		角永茂樹、池田わたる、竹國恭司、盛本浩二、佐藤啓子、竹内勝一、今

	子 Necl-5/Tage4 (2)：ネクチン非依存性でインテグリン依存性のがん細胞の運動促進作用 （査読付）			学会総会 （於：愛知県立がんセンター）		井俊夫、高井義美
	学会発表９ ネクチン様分子 Necl-5/Tage4 (1)：ネクチン-3 とのヘテロな結合によるがん細胞の運動促進作用 （査読付）	共	平成 15 年９月	第 62 回日本癌学会総会 （於：愛知県立がんセンター）		竹國恭司、池田わたる、角永茂樹、盛本浩二、佐藤啓子、竹内勝一、今井俊夫、高井義美
	学会発表 10 マウス急性 GVHD モデルにおけるドナー由来 CD8+ T 細胞での CX3CR1 の発現 （査読付）	共	平成 15 年 12 月	第 32 回日本免疫学会学術総会（於：東海大学医学部）		西村美由希、濱口晶子、盛本浩二、水野恵子、今井俊夫
	学会発表 11 Rac-IQGAP1-アクチン細胞骨格による E-カドヘリンのエンドサイトーシスの制御機構 （査読付）	共	平成 16 年５月	第 63 回日本癌学会総会（於：久留米大学先端癌治療研究センター）		馬場威、匂坂敏朗、泉鉉吉、田中晋太朗、盛本浩二、高井義美
	学会発表 12 Mirating postmitotic neural precursor cells in the ventricular zone apically extends the	共	平成 16 年５月	第 57 回細胞生物学会（於：大阪大学大学院医学系研究科）		Yasuko Minaki, Koji Morimoto, Tomoya Nakatani, Yosimasa Sakamoto, Yoko Inoue, Keiko Sato, Eri Mizuhara, Toshio Imai, Yoshimi Takai, and Yuichi Ono

	processes and form adherens junctions near the ventricle.（査読付）					
	学会発表 13 A novel counter ligand for coxsackie and adenovirous receptor (CAR), CARL, preferentially expressed on Th1 cells.（査読付）	共	平成 16 年 5 月	第 57 回細胞生物学会（於：大阪大学大学院医学系研究科）		Keiko Sato, Yoko Inoue, Akiko Hamaguchi, Koji Morimoto, Masakazu Takeuchi, Miyuki Nishimura, Toshio Imai
	学会発表 14 Role of Nectin-like molecule-5/Poriovirus receptor/CD155 on tumor metastasis into the lung.（査読付）	共	平成 16 年 5 月	第 57 回細胞生物学会（於：大阪大学大学院医学系研究科）		Koji Morimoto, Keiko Sato, Yoko Inoue, Akiko Hamaguchi, Masakazu Takeuchi, Wataru Ikeda, Yoshimi Takai, and Toshio Imai
	学会発表 15 Involvement of Lmo7 in the association of two cell-cell adhesion molecules, nectin and E-cadherin, through afadin and a-actinin in epithelial cells.（査読付）	共	平成 16 年 5 月	第 57 回細胞生物学会（於：大阪大学大学院医学系研究科）		Takako Ooshio, Kenji Irie, Koji Morimoto, Atsunori Fukuhara, Toshio Imai, and Yoshimi Takai
	学会発表 16 大腸がんの肺転移モデルにおける Nectin-like	共	平成 16 年 9 月	第 64 回日本癌学会総会（於：札		盛本浩二、岡田雅之、池田わたる、高井義美、今井俊夫

	molecule-5/Tage4/PVR/CD155の役割と作用機構 （査読付）			幌医科大学）		
	学会発表17 Th1細胞の選択的浸潤に関わる新規細胞接着分子 （査読付）	共	平成17年12月	第35回日本免疫学会学術総会（於：東京大学医科学研究所）		山口啓子、井上陽子、力津絵津子、濱口晶子、盛本浩二、西村美由紀、河野鉄、今井俊夫
	学会発表18 ConA肝炎における CX3CR1陽性マクロファージの役割 （査読付）	共	平成17年12月	第35回日本免疫学会学術総会（於：東京大学医科学研究所）		西村美由紀、久保井良和、水野恵子、盛本浩二、村本賢三、今井俊夫
	学会発表19 Necl-5/CD155と DNAM-1/CD226の結合によるがん細胞と血小板の細胞接着および肺転移への関与 （査読付）	共	平成17年12月	第35回日本免疫学会学術総会（於：東京大学医科学研究所）		盛本浩二、山口啓、濱口晶子、井上陽子、岡田雅之、今井俊夫
	学会発表20 VEGFRa inhibitor E7080 inhibits lymph node metastasis of human breast carcinoma, by preventing murine lymphatic endothelial cells from	共	平成18年11月	第15回日本がん転移学会・第11回国際がん転移学会合同会議（於：徳島大学）		Junji Matsui, Akihiko Tsuruoka, Koji Morimoto, Toshimitsu Uenaka, Yuiji Yamamoto, Masayuki Okada, Shinya Abe, Toshiaki Wakabayashi, and Makoto Asada

	lymphangiogenesis. （査読付）					
	学会発表 21 VEGFRs inhibitor E7080 inhibits lymph node metastasis of human breast carcinoma, by preventing murine lymphatic endothelial cells from lymphangiogenesis. （査読付）	共	平成 18 年 11 月	8th EORTC-NCI-AACR International Conference on Molecular Targets and Cancer Therapeutics（チェコ共和国）		Junji Matsui, Akihiko Tsuruoka, Koji Morimoto, Toshimitsu Uenaka, Yuji Yamamoto, Masayuki Okada, Shinya Abe, Toshiaki Wakabayashi, and Makoto Asada
	学会発表 22 ALDH1 陽性乳癌幹細胞の免疫組織学的同定と化学療法耐性との相関に関する検討 （査読付）	共	平成 21 年 7 月	第 17 回日本乳癌学会学術総会（於：日本医科大学）		多根井智紀、盛本浩二、島津研三、金　昇晋、田口哲也、玉木康博、野口眞三郎
	学会発表 23 乳癌幹細胞のマーカー(ALDH1,CD44+/CD24-)の発現と化学療法抵抗性 （査読付）	共 共	平成 21 年 10 月	第 47 回日本癌治療学会学術集会（於：岩手医科大学医学部産婦人科）		多根井智紀、盛本浩二、島津研三、上田さつき、中山貴寛、金　昇晋、田口哲也、玉木康博、野口眞三郎
	学会発表 24 Microtubule stabilization and retrograde transport proteins	共	平成 22 年 2 月	50th The American society for Cell Biology		Takeshi Fujiwara, Koji Morimoto, Toshihide Yamashita, and Yoshihiro Yoneda

	prevent axon degeneration（査読付）			（於：Philadelphia Pennsylvania Convention Center）アメリカ		
	学会発表25 ６π-アザ電子環状反応による汎用的な細胞表面へのビオチン修飾と蛍光イメージング（査読付）	共	平成23年9月	第5回バイオ関連化学シンポジウム（於：日本化学会他）		横井里美、盛本浩二、中山郁理、小山幸一、藤原武志、田中克典、深瀬浩一
	学会発表26 胃がん腹膜転移におけるバイオマーカーの網羅的解析（査読付）	共	平成23年9月	第16回日本外科病理学会学術集会（於：近畿大学病院外科）		菊池正二郎、中森正二、盛本浩二、保井裕子、小澤りえ、多田武志、山下英孝、海辺展明、大嶋勉、堀高明、竹村雅至、笹子三津留
	学会発表27 胃癌組織の多様性と浸潤性におけるEMTの網羅的解析（査読付）	共	平成23年10月	第70回日本癌学会学術総会（於：愛知県がんセンター研究所）		菊池正二郎、盛本浩二、中森正二、落合登志哉、辻村亨、廣田誠二、松原長秀、冨田尚裕、笹子三津留
	学会発表28 浸潤型胃がんにおけるEMTとがん関連線維芽細胞の相互作用解析	共	平成23年10月	第49回日本癌治療学会学術集会（於：埼		菊池正二郎、盛本浩二、中森正二、竹村雅至、堀高明、大嶋勉、松本友寛、海辺展明、山下英孝、小澤りえ、廣田誠一、松原長秀、冨田尚裕、笹子三津留

	（査読付）			玉医科大学）		
	学会発表29 胃がんにおけるEMTと胃がん－がん関連線維芽細胞の相互作用機序 （査読付）	共	平成24年4月	第112回日本外科学会（於：千葉大学）		菊池正二郎、盛本浩二、中森正二、竹村雅至、堀高明、大嶋勉、松本友寛、海辺展明、山下英孝、多田武志、小澤りえ、廣田誠一、前山義博、笹子三津留
	学会発表30 スキルス胃癌浸潤における微小環境の関与 （査読付）	共	平成24年7月	第21回日本がん転移学会学術集会・総会（於：広島大学）		菊池正二郎、前山義博、小澤りえ、海辺展明、山下英孝、松本友寛、大嶋勉、堀高明、竹村雅至、盛本浩二、中森正二、廣田誠一、笹子三津留
	学会発表31 胃がん浸潤と腹膜転移におけるがん-がん微小環境の相互作用解析 （査読付）	共	平成24年7月	第67回日本消化器外科学会総会（於：金沢医科大学）		菊池正二郎、盛本浩二、中森正二、竹村雅至、堀高明、大嶋勉、　松本友寛、海邊展明、　前山義博、笹子三津留
	学会発表32 軸索逆行性輸送タンパク質ダイニン・ダイナクチン複合体はグルタミン酸毒性に起因する神経細胞変性を制御する （査読付）	共	平成24年9月	第35回日本神経科学大会（於：名古屋大学）		藤原武志、盛本浩二、柿田明美、高橋均
	学会発表33 腫瘍先進部におけるがん―線維芽細胞相互作用は胃がん再発の危険	共	平成24年9月	第71回日本癌学会学術総会（於：札幌医科		菊池正二郎、前山義博、仁和浩貴、松本友寛、海辺展明、山下英孝、大嶋勉、堀高明、川崎健太郎、竹村雅至、盛本浩二、中森正二、廣田誠一、笹子三津留

	因子である （査読付）			大学）		
	学会発表 34 スキルスがん細胞の移動におけるがん関連線維芽細胞の役割 （査読付）	共	平成 24 年 9 月	第 71 回日本癌学会学術総会 （於：札幌医科大学）		前山義博、菊池正二郎、仁和浩貴、盛本浩二、竹村雅至、中森正二、廣田誠一、笹子三津留
	学会発表 35 がん関連線維芽細胞は胃がん腹膜播種の悪性度にどのような影響を与えるか？ （査読付）	共	平成 25 年 4 月	第 113 回日本外科学会 （於：九州大学）		菊池正二郎、盛本浩二、中森正二、竹村雅至、川崎健太郎、堀高明、大嶋勉、仁和浩貴、松本友寛、海辺展明、山下英孝、廣田誠一、前山義博、笹子三津留
	学会発表 36 Growth and spread of gastric cancer cells are regulated by cancer-associated fibroblasts （査読付）	共	平成 25 年 6 月	10th International Gastric Cancer Congress（イタリア）		Shojiro Kikuchi, Yoshihiro Maeyama, Nobuaki Kaibe, Hidetaka Yamashita, Hirotaka Niwa, Masashi Takemura, Koji Morimoto, Shoji Nakamori, Seiichi Hirota, Mitsuru Sasako
	学会発表 37 乳癌術前化学療法の病理学的完全寛解に対する独立した予測因子としての腫瘍内制御性 T 細胞 （査読付）	共	平成 26 年 7 月	第 22 回日本乳癌学会学術総会 （於：大阪大学医学系研究科乳腺内分泌外科）		小田直文、島津研三、直居靖人、盛本浩二、下村淳、下田雅史、加々良尚文、丸山尚美、金昇晋、野口眞三郎
	学会発表 38 糖鎖の化学的ワンポット複合化法と動物個体内での動	共	平成 26 年 8 月	第 33 回日本糖質学会 （於：日本糖鎖		小椋章弘、田原強、野崎聡、盛本浩二、木塚康彦、北爪しのぶ、渡辺恭良、谷口直之、田中克典

	態解析 （査読付）			学会）		
	学会発表 39 がん間質反応で胃がん治療戦略を考える （査読付）	共	平成 26 年 9 月	第 73 回日本癌学会学術総会 （於：がん研究会有明病院）		菊池正二郎、福井広一、盛本浩二、仁和浩貴、前山義博、松本友寛、中森正二、廣田誠一、笹子三津留
	学会発表 40 胃がん組織由来間質細胞はがん細胞を G0 期に誘導し細胞周期を制御する （査読付）	共 共	平成 27 年 12 月	第 38 回日本分子生物学会年会 第 88 回日本生化学大会 合同大会 （於：京都大学、京都産業大学）		岩本典子、菊池正二郎、小澤りえ、盛本浩二、中森正二、笹子三津留
	学会発表 41 Cancer associated stromal cell induced G0 arrest and invasiveness through SASP in gastric cancer. （査読付）	共	平成 28 年 3 月	第 88 回日本胃癌学会総会 （於：がん研究会有明病院）		菊池正二郎、岩本典子、小沢りえ、中尾栄一郎、仁和浩貴、瀧井麻美子、海邊展明、大嶋勉、竹村雅至、盛本浩二、中森正二、笹子三津留
	学会発表 42 原発性乳癌における FDG-PET の SUVmax 値を規定している因子の同定	共	平成 29 年 7 月	第 25 回日本乳癌学会学術総会 （於：熊		井上奈都子、樋口智子、西向有沙、藤本由希枝、柳井亜矢子、宮川義仁、村瀬慶子、文亜也子、盛本浩二、今村美智子、高塚雄一、山野理子、荒木和浩、三好康雄

	（査読付）			本大学大学院生命科学研究部）		
	学会発表 43 TUMOR SIZE AND PROLIFERATIVE MARKER GEMININ RATHER THAN KI67 EXPRESSION LEVELS WERE SIGNIFICANTLY ASSOCIATED WITH MAXIMUM UPTAKE OF 18F-DEOXYGLUCOSE LEVELS ON POSITRON EMISSION TOMOGRAPHY FOR BREAST CANCERS （査読付）	共	平成 29 年 10 月	3rd World Congress on Controversies in Breast Cancer (CoBrCa)		Y. Fujimoto、A. Nishimukai、N. Inoue、M. Takeda、K. Morimoto、K. Kitajima、Y. Miyoshi
	学会発表 44 実臨床合成化学：乳癌の術中断端迅速診断 （査読付）	共	平成 30 年 9 月	第 12 回バイオ関連化学シンポジウム（於：日本化学会―生体機能関連化学部会、バイオテクノロジー部会）		Ambara R. Pradipta、多根井智紀、藤井素子、盛本浩二、野口眞三郎、田中克典
	学会発表 45 Click-to-Sense Acrolein Probe Allows Highly Discriminativ	共	平成 31 年 3 月	16th St. Gallen International Breast Cancer		Tomonori Tanei、Ambara R. Pradipta、Koji Morimoto、Motoko Fujii、Junichiro Ikeda、Eiichi Morii、Shinzaburo Noguchi、Katsunori Tanaka

	e,Rapid, Low-Cost and Easy-to-Perform Diagnosis of Breast Cancer Morphology in Live Tissues （査読付）			Conference in Vienna, Austria		
	学会発表46 生組織標本を用いた乳腺切除断端の術中迅速診断法の開発 （査読付）	共	平成31年4月	第119回日本外科学会総会 （於：大阪大学大学院消化器外科）		多根井智紀、Pradipta Ambara、盛本浩二、藤井素子、三宅智博、直居靖人、加々良尚文、下田雅史、島津研三、金昇晋、田中克典、野口眞三郎
	学会発表47 生組織の標本・捺印細胞を用いた乳腺切除断端の術中迅速診断法の開発 （査読付）	共	令和元年7月	第27回日本乳癌学会学術総会 （於：埼玉医科大学国際医療センター）		多根井智紀、Ambara Pradipta、盛本浩二、藤井素子、島津研三、三宅智博、直居靖人、加々良尚文、下田雅史、金昇晋、田中克典、野口眞三郎
	学会発表48 Click-to-sense法による乳腺切除断端の術中迅速診断の開発：多施設共同臨床試験(KBCSG-TR2119) （査読付）	共	令和4年6月	第30回日本乳癌学会学術総会 （於：兵庫医科大学）		多根井智紀、北原友梨、波多野高明、久保杏奈、Pradipta Ambara、盛本浩二、増永奈苗、吉波哲大、阿部かおり、草田義昭、三宅智博、加々良尚文、下田雅史、田中克典、瀬尾茂人、森井英一、中山貴寛、吉留克英、増田慎三、島津研三